## 3-5未来への提言──科学・建築と風水の三位一体へ

では、これからの風水は、誰と手を結ぶべきなのでしょうか。

そして、何を目指していくべきなのでしょうか。

答えは明確です。

それは、建築界、科学界、そして風水界が手を取り合い、“氣の整った空間”を社会に提供することであると考えています。

本来、風水は環境設計思想であり、人が心地よく過ごせる場を創造するための体系でした。しかし現代においては、それが建築設計・都市計画・インテリアデザインなどの領域に分断され、一方で科学の側は、物理的数値の最適化に集中してきました。

その結果、人間の“感覚”や“直感”で読み取っていた空間の微細な質──つまり「氣」は、誰にも扱われない空白地帯となってしまったのです。

しかし、いま、時代は変わり始めています。

人々は“機能性”だけでなく、“調和”や“安心感”、“場の雰囲気”といった見えない要素に価値を見出すようになってきました。

建築界でも、「心地よさ」や「感性」を重視する空間づくりが注目されており、科学の分野でも「共鳴」「共感覚」「情報場」といった概念に踏み込み始めています。

ここにこそ、風水の出番があるのです。

風水師は、氣を読む技術と思想を持ち、科学と建築をつなぐ通訳者になることができます。

「この場所の氣が滞っている」

「この方位の流れは逆行している」

「この空間には“焦り”の氣がこもっている」──

これらは数値では表現しきれない情報ですが、確かに“場の情報”であり、それを科学者が測定し、建築家が形にすることで、目に見える空間として“氣の設計”が成立するのです。

風水師だけでは足りません。

科学者だけでも、設計者だけでも、氣は扱いきれないのです。だからこそ、三者がそれぞれの立場を保ちつつ協働する時代が必要なのです。

そして読者の中に、もし科学の道を志す方がいたら、もし建築や不動産の世界で風水に疑問を持たれている方がいたら、ぜひ一度、本物の風水に触れてみていただきたいと思います。それが“迷信ではない”という確信に変わったとき、この時代に、氣の思想が再び根を張る場所が生まれるのです。そして、この融合は、すでに第2章で述べた“スピリチュアルと科学の接続”にも通じることになります。

氣という概念は、古代には宗教や哲学の中で語られ、現代では量子や波動の文脈に接続されようとしております。風水とはまさに、その両者を“空間”という実践領域でつなぐ存在であり、科学でもスピリチュアルでもない“第三の橋渡し役”として生まれた思想なのです。

見えないものを否定せず、かといって神秘に逃げることもなく、体感・空間・設計という現実的な次元で“氣”を捉え直す──それが、風水の持つ本来の可能性であり、いま私たちが目指す“融合の道”なのです。